

シンポジウム

以下は本学会第22回大会（2004年9月11日・12日、福岡教育大学）の第2日目に行われたシンポジウムの提案を上梓したものである。ただし、全体の構成上一部を提案者に加筆していただいたことを付記しておく。

〈テーマ〉

1920年代・1930年代日本におけるペスタロッチー —どのようにペスタロッチーは論じられたか—

司会 乙訓 稔（実践女子大学）

木内陽一（鳴門教育大学）

指定討論者 清水禎文（東北大学）

長田新とペスタロッチー

広島大学 鈴木 由美子

はじめに

今回のシンポジウムで、長田新（1887～1961年）へのペスタロッチー教育学の影響から、1920年代、1930年代の日本の教育学へ与えたペスタロッチー教育学の影響について読み解くようにとの課題をいただいた。私にとっては大変大きな課題であるが、長田新との面識がまったくない世代が、長田新を語る意味もあるのではないかと考え、不十分な認識であることを承知の上で提案をお引き受けすることにした。

これまで各方面から長田新を研究してこられた先生方、長田新から直接薫陶を受けられた先生方、またご子息であられる長田五郎先生を前にして大変恐縮しているが、本日の提案への率直なご意見をいただき、日本の教育学へのペスタロッチーの影響関係が少しでも明らかになれば、提案させていただいた意味もあるのではないと思う。なお、本提案では、長田新を研究対象とするので敬称を略させていただくことにする。

日本におけるペスタロッチー研究の第一人者であり、またその理論に名前が冠される数少ない教育学研究者のうちのひとりである長田新、彼の教育学形成にペスタロッチー（J.H.Pestalozzi, 1746-1827）がどのような影響を与えたかについて検討するのが、本提案の趣旨である。本提案では、船山謙次や矢川徳光にしたがって¹⁾、長田の教育学理論を「長田教育学」とよぶことにする。長田教育学をめぐる評価は、今日においてもまだ難しいといえるが²⁾、長田教育学を、その時代背景や成立事由などを含めて、きちんと評価していくことは、私たちが今日直面している問題点を直視し、その解決方策を検討する上でも重要なことだと考える。ただし本日は、シンポジウムの趣旨にのっとり、長田教育学に与えたペスタロッチー教育学の影響にしばって提案することにする。

1. 長田新とペスタロッチーの出会い

まず、長田とペスタロッチーとの出会いについてであるが、大きく分けると次の3期に分けることができる³⁾。第1期は長野県立諏訪中学校、広島高等師範学校から大分県師範での教員生活、京都大学での研究、澤柳政太郎の秘書を経て、成城小学校（1917年に澤柳が創設）で実践研究を行い、広島高等師範学校に就職するまでの時期である。直接的にペスタロッチーを研究したわけではないが、後にペスタロッチー研究へと進む素地が作られた時期といえるだろう。

次に第2期だが、これは広島高等師範学校、広島文理科大学（1929年開設）において長田が精力的にペスタロッチー研究と運動を広めた時期である。本日の提案はこの時期を中心としたものである。

第3期は、第2次世界大戦後、自分自身の被爆体験などから、ペスタロッチー研究とともに教育学研究、平和教育・運動を展開した時期である。

以上のように大別すると、1920年代から1930年代にかけての長田とペスタロッチー教育学との関係は、長田がペスタロッチー研究を深めながら、自分自身の教育学を形成していった時期と考えることができる。その意味では、もっとも影響関係が強い時期とも言えるかもしれない。逆にいえば、長田の見解とペスタロッチーの見解とが、ある意味では渾然一体となっている時期とも言えるだろう。こうした渾然とした影響関係のなかからエッセンスを取り出すのは、

かなり難しいことではあるが、今回それを提案させていただきたいと思う。

2. 長田新の教育学研究の発展

まず、長田の1920年代以前の主張であるが、1919年に論文「産業革命と現今の教育問題」(『帝国教育』1919年)において、長田は教育学を産業革命以降の社会状況との関連においてとらえる必要性を指摘している。この論文にはデューイ (J.Dewey, 1859-1952) の影響が見てとれる。この後、1921年8月から長田は約1年間欧米各国の教育政策・教育事情の視察に出かける。この経験が、新教育への目を開かせたともいえる。この欧米視察で、長田はドイツに最も長く滞在し、シュプラランガー (Ed.Spranger), リット (Th.Litt), ナトルプ (P.Natorp), ケルシェンシュタイナー (G.Kerschensteiner) と会っている。

ペスタロッチーとの関連にしぼっていくと、長田は1921年2月にペスタロッチーの名を冠した論文を公表している(「ペスタロッチの「教育即生活」の意味」, 『学校教育』第92号)。この中で長田は、ペスタロッチの認識論は、理想主義の上に立っていること、そこにルソー (J.-J.Rousseau, 1712-1778) からの超越があり、それゆえ「自己活動」「自己創造」が中心原理となっていると述べている。この後、1924年2月から1926年2月まで、ナトルプの理想主義を参考にしながら、ペスタロッチー教育学について検討する8本の論文を公表し、1925年には『ナトルプに於けるペスタロッチの新生』を公刊している。この時期、長田はナトルプを研究しながらも、ナトルプらの理想主義哲学は、ペスタロッチーの教育学の根本理念である「自発性」の原理に基礎をおいていることなどから、社会的教育学はペスタロッチーの社会的立場を発展させ基礎づけしたものと見えるとし、ペスタロッチー研究によってナトルプを超える視点が見つかるであろうことを示唆している。

ペスタロッチー没後100年を記念して出版された『ペスタロッチーの教育思想』(1927年)は長田が書いたペスタロッチーに関する初めての本格的な研究書であるが、この中で長田はペスタロッチー教育学の特徴として、「経験」と「哲学」を統一した教育学の方法論、感覚と精神との一元的統一という「合自然性の原理」、理念と感性とを統一した「直観論」をあげ、自分独自の枠組み

を提案しようとしている。

以上のことから、1920年代に社会的教育学の立場からナトルプの研究に取り組んだ長田は、ナトルプの理想主義哲学にもとづく教育学の根底にあるペスタロッチー教育学へと研究を進め、その結果、教育学の方法論としての「経験」と「哲学」の統一、教育原理としての「合自然性の原理」、教育方法論としての「直観」をペスタロッチー教育学から学びとったといえると考えられる。

1920年代後半の長田の身边は激動の波に洗われる。1927年は、ペスタロッチー没後100年にあたり、国内外でペスタロッチー祭が盛大に営まれ、長田も記念出版をしている。ペスタロッチー研究が順調に発展すると思われたその一方で、12月、澤柳政太郎が猩紅熱で急逝する。『平和を求めて』によると、このころから帝国教育会が急激に反動化していく。1928年6月29日には「治安維持法」が出されている。こうした状況の中で、長田は1928年3月から約1年半、ドイツに留学している。このときはリットに師事して教育哲学を研究し、スイスにも2度訪れ、ペスタロッチー研究所やペスタロッチーの遺跡を調査している。この経験がペスタロッチー研究に幅と深まりをもたせたのではないかと考えられる。

3. 1930年代における長田教育学の形成

1929年4月1日に広島文理科大学が開設され、長田は教育哲学・教育史の研究と指導にあたった。ここから1939年までが長田の研究が飛躍的に進んだ時期といえる。1933年に京都帝国大学より「ペスタロッチー研究」で学位取得、『教育学』（岩波書店、1933年）、『ペスタロッチー教育学』（岩波書店、1934年）、『教育活動の本質』（同文書院、1936年）、『近世西洋教育史』（岩波書店、1936年）、『最近の教育哲学』（岩波書店、1938年）と主要著作を次々と公刊している。また発表した論文数も、大小合わせると100本以上にのぼる⁴⁾。この時期に長田は自分自身の教育学理論を形成していったと推測される。

ここで今日の主眼点である、長田教育学の形成に与えたペスタロッチーの影響について考察していくことにする。ここで取り上げるのは、長田のペスタロッチー研究の集大成ともいえる『ペスタロッチー教育学』と、長田が自分自身

の教育学理論について追想的に述べている「余の教育学をめぐるて」（『教育』第3巻第1号、1935年）という論文である。

まず、長田が京都帝国大学に提出した学位論文である『ペスタロッチー教育学』であるが、今なおペスタロッチー研究の最高水準をもつ研究書といえるであろう。長田が、『ペスタロッチー教育学』の中で示しているペスタロッチー理解の特徴として、以下の3点を上げることができる。第1に、ペスタロッチー教育学の方法的特質として、感性和理性との一元的統一、経験と哲学との一致をあげている点である。これは『ペスタロッチーの教育思想』においても指摘されている点であるが、長田はこの点を従来の哲学、とくにカントが述べていたような二元論に代わる教育学理論だという点を強調している。

第2に、社会改革家、初等教育改革家としてのペスタロッチー理解を示している点である。長田は『立法と嬰兒殺し』をひきあいに出しながら、社会改良は法による処罰ではなく、一人ひとりの人間の教育から始まるということを主張し、後の教育立国論につながる視点を示している。

第3に、ペスタロッチー教育学を、理論的側面としての哲学的基礎と、実践的側面としての合自然の原理、直観といった実践論という2側面からとらえている点である。ここには、実践学として教育学をとらえる視点が示されている。

この『ペスタロッチー教育学』と長田教育学との関連は、渾然一体となっていて分析しにくいところではあるが、「余の教育学をめぐるて」を参考にしながら、整理していきたいと思う。

「余の教育学をめぐるて」は長田自身による研究史的な内容をもつ論文である。「余の教育学をめぐるて」において、長田は、自分がペスタロッチーに強く引きつけられた要因として、第1に、「東京時代以来懐いていた小学教育に対する強い関心」であり、第2に、「実践学としての教育学はまた経世学であり、社会改革学であり、救世済民法である」という長田の教育学理解から見たとき、ペスタロッチーがこうした理解を示した教育史上最初の人物だったという点をあげている。

長田はこの論文の中で、広島高等師範学校で、小西重直、春山作樹、西晋一郎といった先生から思想的な影響を受けたこと、大分での教員経験により自己

の天職を発見したという感慨をもったこと、教育という仕事の性質を研究したいという欲求をもったということを述べている。これは前述の枠組みでいえば第1期にあたることである。ペスタロッチーを特定したわけではないけれども、教育という仕事、とくに教育の性質を研究したいという関心を持った時期といえる。長田にとって重要な意味をもつのは、澤柳政太郎からの影響である。長田は澤柳を評して「根底ある人格的な理念の信者」、「国本を培うものが小学教育であるという強い信念」をもった人物であったと述べている。澤柳との共同で参画した成城小学校の実践について、長田は、「私の教育学にして若し『空中楼阁の教育学 (luftschuloss Pädagogik)』とでも言いたくないような彼の理論の為の理論の教育学と少しでも異なる点があるとすれば、それは主として此等の体験の賜物であるかもしれない」と述べている。長田は、教育本質観は小西重直から、教育事実の重視は澤柳から学んだとして、このふたりの影響を認めている。

この論文の中で示されている長田の教育学理解によれば、教育学はひとつの実践学であり、それゆえ、長田は教育学研究においては理論的関心とともに「時代の生きた動向に注意すべき」であるとしている。長田はこれらを「現代若しくは最近の教育哲学」と「新教育」とであるとしている。長田は、教育活動の本質を理論的に探究すればするほど現代教育の改革に関心を持たざるを得なかったとし、理論的探究と実践的探究とを結びつける視点を示している。

このように考えると、この時点で長田教育学に与えたペスタロッチー教育学の影響は哲学的理論と実践とを結びつける論構成そのものに見られるのではないかと考えられる。この観点からペスタロッチー教育学の影響として以下の2点があげられる。

第1に、そもそも持っていた社会的関心と教育的関心とを結びつける論理をペスタロッチーから学んだという点があげられる。長田は1919年の論文「産業革命と現今の教育問題」(『帝国教育』1919年)において、「教育の意義は、一般大衆を対象として資本主義社会に適応させることにある」と述べ、社会状況に立脚した道徳教育が必要であると指摘しているし、1920年の論文「近世に於ける個人主義の発展」(『帝国教育』第455号、1920年)においても「国家の機能

を個人の完成にあるとみる国家思想は個人主義そのものである」とし、そこから近世個人主義が生まれたと述べているが、国家の機能と教育との関連は十分解明されてはいない。これに人間の教育の立場から回答を与えたのがペスタロッチーであり、そこから社会の根本を教育において考える方向性、さらにいえば、哲学的理論を現実の教育改革と結びつけて考える方向性が示されたのではないと思われる。

第2に、長田教育学は教育活動の本質解明を目的としており、そのため教育学構成が理論と実践の両方から成り立つものとなっているが、これらを結びつける教育学独自の方法論をペスタロッチーから学んだということがあげられる。この点について長田は「本質直観」をあげている。「本質直観」という言葉は、『ペスタロッチー教育学』でも用いられているが、従来の科学の演繹的方法と帰納的方法のいずれでもない、教育学的方法だと述べている。これをペスタロッチーから学び、教育学独自の方法論として構成しようとしたのではないかと考えられる。この点について伏見猛弥からの批判もあったが、長田は教育学に独自の方法論だと主張している⁹⁾。このような教育学独自の方法論の提案に、ペスタロッチー教育学が影響を与えていると考えられる。

終わりに

こうしたペスタロッチー教育学からの影響は、この時代の長田にとってふたつの意味で重要であったと思われる。第1に、日本社会が次第にファシズム化しつつあり、個人の尊厳が脅かされつつある状況のなかで、そうした状況を「個人から、人間から」鋭く批判する視点を持ち得た点である。第2に、教育学の学問的水準を高めることで、教育界にはいりこみつつあった非科学的な教育理論を科学的に批判する視点を持ち得た点である。1930年代後半から長田はさらに厳しい状況に追い込まれていくが、そうした状況との関わりの中での長田教育学の発展へのペスタロッチー教育学の影響についての検討は、今後の課題としたい。

【注】

- 1) 船山謙次「『長田教育学』の発展」(『平和を求めて -長田新 論文・追想記-』広島大学新聞会, 1962年, p.190-194), 矢川徳光「『長田教育学』の本質」(『平和を求めて -長田新 論文・追想記-』, p.281-292), 船山謙次「長田教育学に学ぶ」(『信州白樺 長田新特集』第61・62・63号合併号, 1985年)等参照。
- 2) 中野光「ペスタロッチーを学んだ2人の教育学者-澤柳政太郎・長田新におけるペスタロッチーとの出会いと継承-」(日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要『人間教育の探究』第16号, 2004年), 長田五郎「長田新の平和教育論(1)~(6)」(明星大学戦後教育史研究センター『戦後教育史研究紀要』第12号~17号, 1998~2003年), 木村元「自由教育派の教育学と国民学校論 -長田新の教育学における「教授」と「錬成」-」(教育史学会紀要「日本の教育史学」第33集, 1990年), 高橋智「長田新の教育学説史研究-戦後教育論の展開と構造に関するノート-」, 近藤真庸・村井淳志「大正期における長田新の教育内容改革論」, 草野滋之「戦前における長田新の教育学理論の特質に関する一考察」, 東京都立大学大学院山住ゼミ・長田新文献目録作成委員会編「長田新文献目録」(以上, 東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第3号, 1984年), 長浜功『教育の戦争責任』大原新生社, 1979年, p.112-120, 等参照。
- 3) 以下, 『平和を求めて -長田新 論文・追想記-』広島大学新聞会, 1962年, p.333-361を参照。本文中では『平和を求めて』と略記する。長田新の略伝的な部分においては主として『平和を求めて』を参考にした。
- 4) 東京都立大学大学院山住ゼミ・長田新文献目録作成委員会編「長田新文献目録」(東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第3号, 1984年), 参照。長田新の著書・論文の検索においては主としてこの「長田新文献目録」を参考にした。
- 5) この点については, 伏見猛弥が「長田新博士の教育学」(『教育』第4巻第1号, 1936年)のなかで批判的にとりあげている。それに対して長田自身が「伏見猛弥君「長田博士の教育学」を讀みて」(『教育』第4巻第4号, 1936

年)において反論している。

【長田新の主要著書・論文】

『ナトルプに於けるペスタロッチの新生』イデア書院 1925年

『ペスタロッチーの教育思想』岩波書店 1927年

『ペスタロッチー教育学』岩波書店 1934年

「産業革命と現今の教育問題」(『帝国教育』1919年)

「経済的教育学より見たる歴史教授の改造(1)(2)」(『教育問題研究』第2, 3号1920年5, 6月)

「ペスタロッチの「教育即生活」の意味」(『学校教育』第92号, 1921年)

「ペスタロッチと理想主義の哲学(1)(2)(3)(4)」(『学校教育』第127, 128, 129, 133号(1924年2, 3, 4, 7月))

「パウル・ナトルプ「ペスタロッチの理想主義」(5)(6)(7)」(『学校教育』第138, 139, 140号(1924年12月, 1925年1, 2月))

「ペスタロッチと理想主義の教育学」(『学校教育』第152号, 1926年6月)

「余の教育学をめぐりて」(『教育』第3巻第1号, 1935年)

(長田新の著書・論文からの引用の際には、できるだけ現代仮名遣いにあらためさせていただいた。)

【謝辞】

本提案にあたって、長田五郎先生、中野光先生、藤井敏彦先生、浜田栄夫先生、鳥光美緒子先生をはじめ多くの先生方のご指導ご助言をいただきました。また長田新関係の資料収集にあたっては広島大学教育学部4回生藤橋智子さんに献身的なご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。